平泉

岩波写真文庫 69

平泉 69

岩波写眞文庫 69 平泉

編集 岩波書店編集部
写眞 泉秀二
朝日新聞文化事業團
岩波映画製作所

中尊寺十八院の一つ．法泉院小前沢坊．

はじめに

平泉、といえば日本史の興味ふかい一こまが思い起される。奥州藤原氏がここを本拠として百年の繁栄の夢をのこした。それは古代の終りごろのことで、混沌の中から中世が生れ出ようとする時代である。しかし蝦夷豪族の勢力を受けついで繁栄した藤原三代も、やがては、まったく新しい武家政治の体制を作りあげた源頼朝のまえに屈服しなければならなかった。

それから八百年経った。藤原氏の遺した多くのものはいつか失われ、奥羽の富をあつめた平泉もいまは貧しい一農村にすぎない。ただ幸いにも保存されてきた有名な金色堂やその他の史蹟がわたしたちに昔を物語る。それらの跡を辿りながら、奥州藤原氏とはどういう人々か、彼らを生み出した環境、彼らが今日に遺したもの、を知ろうとするのがこの本の目的である。

目　次

定価100円 1952年8月10日 第1刷発行 1958年9月20日 第10刷発行 © 発行者 岩波雄二郎 印刷者 米屋勇 印刷所 東京都港区芝浦2ノ1 半七写真印刷工業株式会社 製本所 永井製本所 発行所 東京都千代田区神田一ツ橋2ノ3 株式会社岩波書店

平泉村近傍図

西磐井郡　前沢町　生母村　長島村　平泉村　厳美村　山目村　萩荘村　眞滝村　一関市　北上川　東北本線　中尊寺　金色堂　毛越寺　衣川柵跡　白鳥柵跡　衣関跡　達谷窟

平城，平安時代の奥羽
（大日本読史地図より）

奥羽の住民

平泉に中尊寺を建てた藤原清衡は、今も寺に遺る供養願文の中で「俘囚之上頭」と自称した。俘囚とは帰順して内地の風俗に同化した蝦夷のことで、そうした蝦夷の長と彼が名のったのは、彼がやはり俘囚長であった安倍氏や清原氏の権威を受けついだからだと思われる。ずっと昔、奥羽には歴史上蝦夷と呼ばれる人々の祖先が住んでいてここに石器時代を過し優秀な土器を遺した（4頁参照）。だが畿内に形づくられた国家が発展するにつれて蝦夷地の征服も早くから行われ、大化改新の後は征討に強制移民や懐柔が伴い、いわゆる以夷制夷ということが頻りだった。蝦夷の叛乱もなかなか絶えなくて大和國家の東北経略は数世紀を要した。だが古代の畿内人の眼には異境の者と映っただろう蝦夷たちの血も、やがて永い間には日本民族を形成する集團とその文化の中に溶けこんでしまったのである。史上の蝦夷について、現在のアイヌがその血をひくものだとする説がかなり一般化していたので、先年藤原四代のミイラが調査された際もそれがアイヌに似ているか否かが注目されたのだった。蝦夷をいかに理解するかはなお論議の種で、畿内人と異る民族ではなく單に辺境の民だともいわれている。

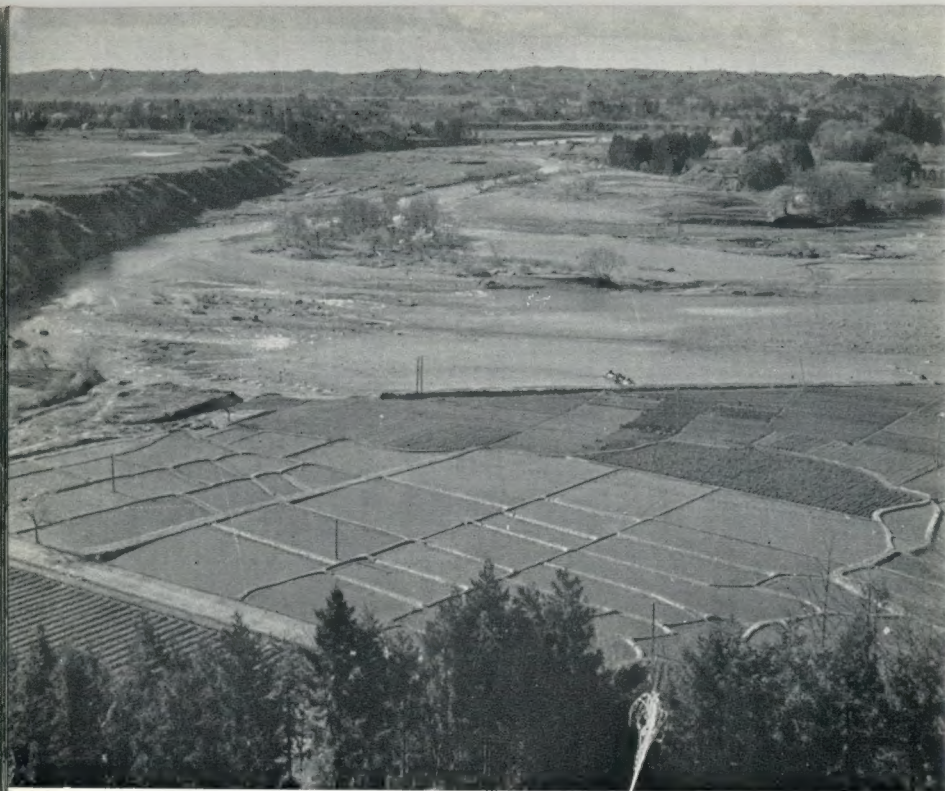
義経堂のある高館の頂きから北上川の上流を望む．右頁は磐井川の上流，厳美渓．

石器時代の遺跡

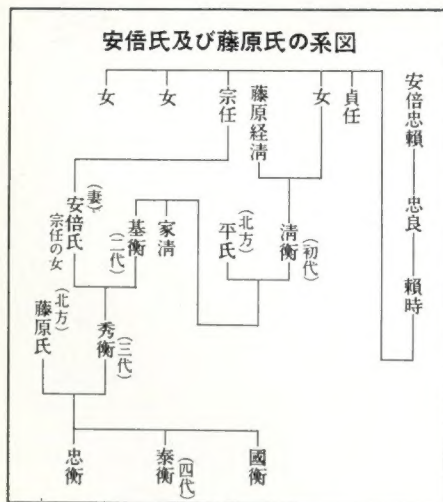
東北には縄文式文化が栄えたから，そのなごりの土器や石器がよく発見される．たまたま平泉に近い水沢町でも，縄文式後期に属するかなり大きい遺跡の発掘にゆきあわせた．①今は田圃になっている遺跡の発掘風景．②土器を石で囲んだ中期の炉址．③掘りだしたばかりの壺．鮮やかな赤色が残っていたが，陽に当るとすぐ褪色した．④信仰の対象かと思われる土偶の破片．⑤石棒．武器か或は指揮棒であろう．⑥鉢．⑦土瓶．⑧⑨壺．

多賀，胆沢城址

東北には大和朝廷が，蝦夷を制するために築いた古い城の跡がいくつかある．多賀城は天平時代に陸奥鎮所のおかれた所で長い間東北経略の中心だった．塩釜の西方にあたり，なだらかな丘陵①②で中央部には壺の碑と呼ぶ多賀城古碑が覆堂におおわれてのこっている③．

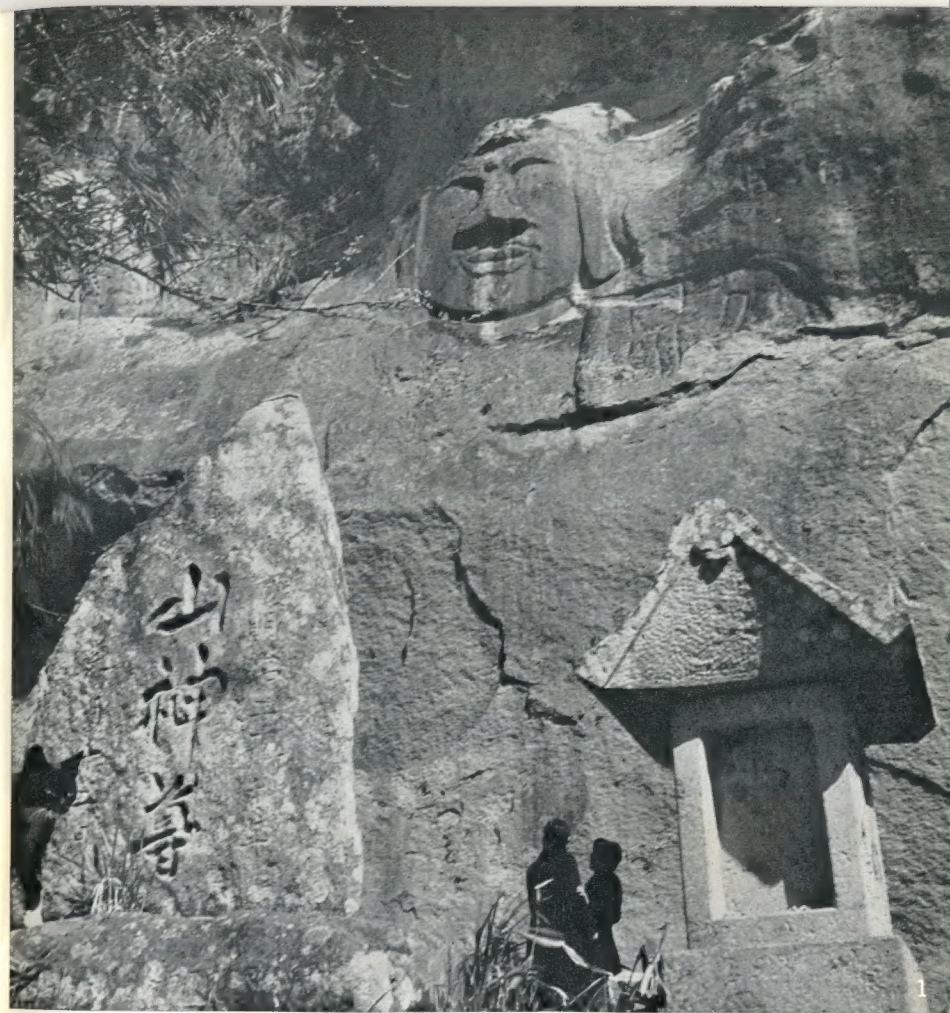
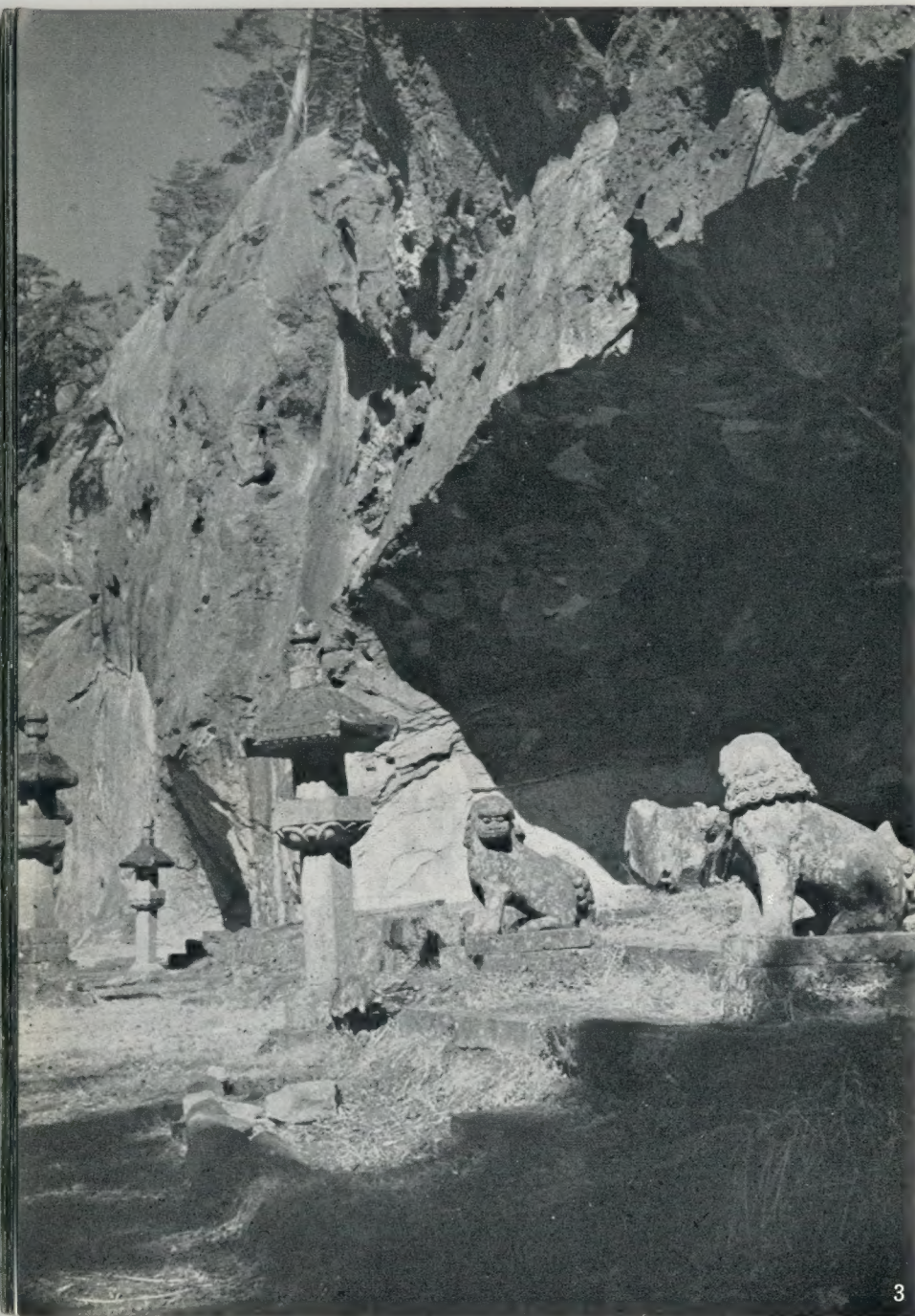
胆沢城址⑤．延暦年間に征夷大将軍坂上田村麿が築いたもの．鎮守府はのちにここへうつる．平泉から北へ二十余粁，北上川のほとり，方八町といわれるがすべて田地となった．⑥はほぼ城の外縁にあたり，左手は北上川の崖になる．④城址には北上川を背にして古い八幡宮がある．土器や瓦，地図文書の類，田村麿の佩刀と称する直刀などを若い宮司が出して見せた

奥羽の歴史

九世紀の半ばから二百年ほどの間、史上には蝦夷の反抗が次第に見えなくなり一見奥羽は静かになる。しかし記録に何も残らないこの静けさのあいだにはきっと大きな変化が奥羽の社会に起っていたと思われる。それはちょうど、大化改新以來の土地制度が崩れ荘園の乱立を見た時代で、京都では攝関家藤原氏の一族が全盛期を過ぎようとしていた。その十一世紀半ばに安倍頼時という人物が現われて、平泉を中心とする六郡を領し國守の命にも従わなかった。詳しいことは分らないが、もうこの頃には辺境奥羽にも大豪族が存在し、中央政府の力の及ばなかった状態を推察させる。この安倍氏を討つために前九年の役が戦われ、それから二十年余りたつとこんどは安倍氏に取って代った豪族清原氏の仲間割れから後三年の役が起った。こうして清原氏も衰えたあと、かわりに陸前を領したのが藤原清衡だった。

安倍氏も清原氏も俘囚長とよばれている。名前は蝦夷らしくないが、これは当時その名を日本風に改める傾向があったものだろう。藤原清衡は安倍氏とも清原氏とも姻戚関係になるし、彼の勢力が両氏のそれを地盤としたことは確かであるから、彼が「俘囚之上頭」と名のったことや、中尊寺の建立にあたって前九年、後三年の役の戦死者を弔う意をこめたこともうなずかれるのである。

前九年の役の古戦場．小松ヵ柵址．この戦は十二年も続くうちに安倍頼時は死んで子の貞任が戦ったが，貞任は小松ヵ柵で敗れてから，衣川関をも失い，厨川で滅んだ．義家と貞任の故事が語り草となる衣川関はいま中尊寺のある関山だとされているが，小松ヵ柵址はそこから約七粁磐井川が著しく蛇行して，殆んど島を作っているかのように見える場所である．

奥州藤原氏も，三代秀衡の頃から藤原秀郷，いわゆる俵藤太の子孫といわれているが，その眞僞のほどは疑わしい．ここでは藤原四代の系図を，安倍氏との関係をつけて書いた．清衡の父は頼時の女婿なので，清衡を頼時の孫とみたのである．

3

1

達　谷　窟

①太田川上流に達谷窟という所がある．岩面に大日如來が彫られ，胸から下は剝落したが縱十二尺余，幅九尺余の顏と肩の一部が殘る．源頼義或いは義家の作といい傳えとにかく千年ほど昔のもの．③傍の浅い洞窟には田村麿の建立，伊達家の再建になる毘沙門堂があったが，終戰後，浮浪者の失火から燒失した．②右は岩窟の横手にある茅葺の不動堂．野趣たっぷりな木彫の不動尊がある．

2

奥州藤原氏と平泉

初代清衡・二代基衡・三代秀衡、奥羽の富を掌中におさめた藤原氏は、院政初期から平家の滅亡にいたる百年間平泉に栄えた。藤原三代には、京都文化への激しい憧憬がある。当時は神社佛閣がさかんに各地に建てられ、それを機縁として都の文化が地方へひろまるという傾きがあった。まして奥羽の地ではかつて誰も持たなかったほどの勢力と富を得た藤原氏だから、この東北の一隅に京に似た都を作り、自ら京の大貴族に匹敵する生活をしようと考えたのも当然かも知れぬ。叡山、法勝寺、平等院などを模し時人を感嘆させた荘麗な平泉諸寺、或は都からそのまま引き移した地名、これらの記録は三代の熱意をまざまざと物語る。それらのうち、金色堂の建築をはじめ佛像や荘厳具など若干の美術品が今に遺されている。いずれも三代が莫大な富を傾けて京の名工に作らせたものにちがいない。事実、平安文化の優秀な遺品といわれるものもその中には多い。にもかかわらず、そのすべてを見渡した時の印象は京都の優しく朗らかな趣きにはほど遠いものがある。東北の風土が紛れもなく重厚な味わいをそれらにあたえた。また八百年の無常な歴史が抜きがたい沈鬱な色をそれらに帯びさせた。平泉という土地のほんとうの魅力はこの廃址と美術品の全体に感じられる不調和と矛盾とが盡きぬ追憶を誘いだすところにある。

束稲(たばしね)山から北上川を隔てて平泉村を遠望する．右手が上流．衣川との合流点に関山がある．その左の小丘は秀衡が金峯山を模して築いたという金鶏山．侵蝕を受けてなかば削り取られた中央部の丘陵は高館．判官館ともいい義経が住んだ所だ．高館の近くには，三代の居館や秀衡が建てた無量光院の跡があり，基衡建立の毛越寺はその後の山間にある．東山とも称した往年の束稲山は，櫻が美しく，西行法師が歌を残したほどだがいつかその面目は失われてしまった．又当時の北上川は束稲山の近くを流れていたから，今河床となっている辺りにも侍屋敷が立ち並んでいた．左の地図は，櫻川とも呼ばれた北上の流れと平泉の街との今昔を示す．

4

5

6

3

関　山　中　尊　寺

関山中尊寺を全体として眺めれば，堂塔四十余宇僧坊三百余宇と記される藤原氏盛時の面影は今はあとかたもない．四代泰衡の滅亡後，平泉諸寺は頼朝の命によって保護されたが，もはや往年の繁栄に立ちもどるべくもなかった．中尊寺では1337年の野火が金色堂と経蔵の一部だけをのこして山内の建築を焼きつくした．

①参道．学校へゆく僧坊の子供たちが降りて来る．②本坊の門．③関山中尊寺の参道への入口．登り口はやや急な坂道で月見坂と呼ぶ．④本坊わきの池で，坊の婦人がしきりと茶碗をすすいでいる．水のとぼしい土地である．⑤本坊の隣には池を前に峯薬師堂．更に進むとややひらけた場所に弁天堂や⑥その他の堂舎がある．

1

2

宝　庫

①金色堂．いま外部から見るのは，金色堂そのものではなくて覆堂である．1288年鎌倉幕府の将軍惟康親王が，金色堂の損壊を惜しむのあまり覆堂を建てさせた．それまでの百六十余年，金色堂は直接風雨にさらされていた．②鐘楼．③大金堂址附近　左手に弁天堂．向うの樹間に彌陀堂と鐘楼．④弁天堂．むこうに見えるのは宝庫．⑥金色堂の軒下から経蔵を見る．⑦大長壽院西谷坊と，⑤その門　現代の中尊寺には，本坊を含め，1337年の大火の後に再興した十八の院がある．一山に住む者およそ百人．十八人の僧はみな妻帯していて各院は世襲制度になっている．大長壽院は経蔵の別当で最も古い院である．この院の二十六代の住職心蓮は平泉が頼朝の手中に落ちた時，中尊寺の保護を願って奔走したと吾妻鑑に記されている人だ．建物としていちばん古い坊は1頁の法泉院小前沢坊で元祿年間の建築．これは普通の農家のようである．

1

①記録に残る三重池の跡と傳える場所．関山の麓で中央の木立が中島の跡というが，確かではない．

②西物見の台地にある白山神社(左手)と伊達家が寄進した能楽堂．例祭にはここで能楽を奉納する．

③は薬師堂境内の宝塔．④は釈尊院墓地にあり，仁安四年と記される五輪塔．在銘のものとしては非常に古いものの一つ．

⑤中尊寺の鐘．建立当時の鐘は1337年の大火で失われ，再び鋳造したもの．

関山には物見と呼ばれる見晴らしのよい場所が二つある．東物見⑥からは衣川と北上の合流点，北上の上流一帯が見渡され西物見⑦からは衣川の流域と奥羽山脈が望まれる．

毛越寺（もうおつじ）

医王山毛越寺金剛王院は二代基衡の建立．吾妻鑑には基衡と本尊薬師の製作者運慶との交渉が述べてある．その記す所によれば，基衡の運慶に対する謝礼は金百両，鷲羽百尻，水豹（あざらし）皮六十余枚，安達絹千疋，希婦細布（きょうのほそぬの）二千端，糠部の駿馬五十疋，白布三千端，信夫毛地摺（しのぶもじずり）千端その他山海の珍物と生美絹（すずしのきぬ）であった．奥羽の物産を窺うに足る．ところが運慶はまだ練絹をほしがったので，基衡は謝礼が少かったかと驚き慌て，練絹船三艘を送った．

①本坊．②大泉池をめぐる芝地に建つ常行堂．③円隆寺と号した金堂の跡．④⑤華麗な寝殿造寺院のなごりはただ廣い芝地にのこる堂塔の礎石，龍頭鷁首の船を浮べたという大泉池と池の石組のみ．

5

毛越寺には古い形式の常行三昧勤行が遺り，それに伴って法樂延年舞を催す習しがある．これは旧正月二十日の行事だが僧たちはとくに舞の数番を花のもとで見せてくれた．①延年舞「花折」，児舞(ちごまい)ともいう．②勅使舞．③路舞のために太鼓を打ちながら唐拍子歌を唄う．歌詞の若干はチベット語だともいうが，ともかく日本語としては理解できない．舞樂は世襲でつたえられ，この種のものでは現存最古の舞踊とされているが，今は名のみ傳わって忘れられた曲も多い．

衣川④⑥．平泉はこの川岸にも延びていた．⑥の対岸は中尊寺のある関山．

⑤無量光院址．三代秀衡が宇治平等院を模して建てたという．梵字池も境内もいまは田園になった．

奥州藤原氏の滅亡

奥州藤原氏の滅亡には、平家が滅び鎌倉幕府がたてられるという歴史の大きな動きとともに、源頼朝、義経兄弟の軋轢の物語が絡みついている。平泉にいた若い義経は頼朝の挙兵に應じてここを去るが、約七年のち不和になった兄に追われて再び秀衡を頼って來た。彼を快く迎えて庇護した秀衡には、あくまで鎌倉に対抗する心組みで義経に期待するところがあったのかもしれない。だがその年に秀衡は病死した。四代泰衡は長い躊躇の後、頼朝が奥州征伐を企てると聞くに及んで遂に義経を討つ決心をした。だが既に鎌倉をかなめとする武家政治を確立しつつあった頼朝には、義経の死だけでは十分でなく、奥州藤原氏の勢力そのものを抹殺することが必要であった。奥州討伐の軍はやはり起された。これをむかえ撃って敗れた泰衡は、北方に潰走する途上、雨の本拠平泉を過ぎながら、わずかに馬をとめて居館に火を放たせる暇しかなかった。その翌日にはもう頼朝らが灰燼に帰して主もない平泉の館に到着した。一棟の焼け残った倉を開いて見ると数多の宝物があり、頼朝の將たちを驚喜させた。これは吾妻鑑の記事である。概して、都を模倣した富める平泉は、鎌倉武士の眼には珍奇で豪奢なものと映ったようだ。こうして奥羽の古い秩序が崩れたこのとき以來、藤原氏の平泉もまた歴史から消え去った。

高館その他

高館は義経の居館のあと．北上川が流れを変えたので大半を侵蝕され，切り立った崖をなしている③．②頂きには，後年建てられた義経堂があり，義経が泰衡におそわれて自害した所という．ここから北上の悠々たる流れと対岸に束稲山が望まれる①．

④長者ヵ原．三條吉次季春の屋敷址と傳えられる．吉次は奥州と京都の間を往復した金商で，秀衡のために鞍馬の義経を平泉に伴って來た人物である．

⑤三代秀衡の屋敷址．金鶏山の東，無量光院の近くにあって伽羅御所と呼ばれたもの．泰衡もここに住んだ．清衡，基衡の居館であった柳御所はいつか北上の河床になった．

金色堂

金色堂は、その内外ともに金箔をおして燦然たるものだったところからこの名で呼ばれる。清衡が中尊寺のなかに建てた阿彌陀堂で、彼の遺骸はその須彌壇の下に葬られた。彼の子基衡、孫秀衡も清衡に倣い、堂内に各々別箇の須彌壇を造って自身の遺骸を収めさせた。このように墓と阿彌陀堂とを結びつけた埋葬形式は他に例がないのでさまざまの論議を生むが、いずれにしてもここに当時有力であった往生思想にたいする藤原三代の熱心な傾倒が表現されていることはいなみがたい。平安末期の根ぶかい社会的不安は貴族の生活をたえず脅かし、彼らを駆って現世の無常を厭わしめ、かつ極樂淨土への往生を願わしめていた。そのため極樂の主尊阿彌陀如來の像や阿彌陀堂を造建することが当時盛んに行われた。それらのうち今日まで残ったものは数少く、宇治の平等院、九州の富貴寺、白水の阿彌陀堂、日野法界堂などであるが、そのなかで金色堂はもっとも豪華なものである。陸奥に豊富な金を惜しみなく使ったことは単なる奢侈ではなくて、淨土の眩い美しさを表わしたものと思われる。三代の当主も極樂に生れ出ずることを信じ、死後の身をここに置きたいと願ったのであろう。平安末期文化の奥底にひそむ不安は、この東北の棟梁たちの心理までをそのようにふかく浸していたのであろうか。

金　色　堂

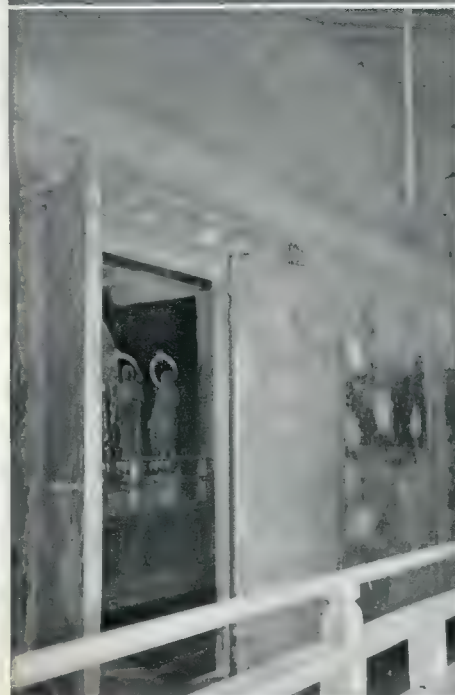
①裏手から見た覆堂(さや)．手前の樹間に金色堂代々の別当の墓石が並んでいる．

④⑤昭和五年から六年にかけて覆堂を解体し，金色堂の大修理が行われた．金色堂そのものの形が人の眼に映ったのは，数百年ぶりというわけである．

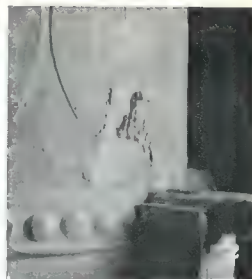
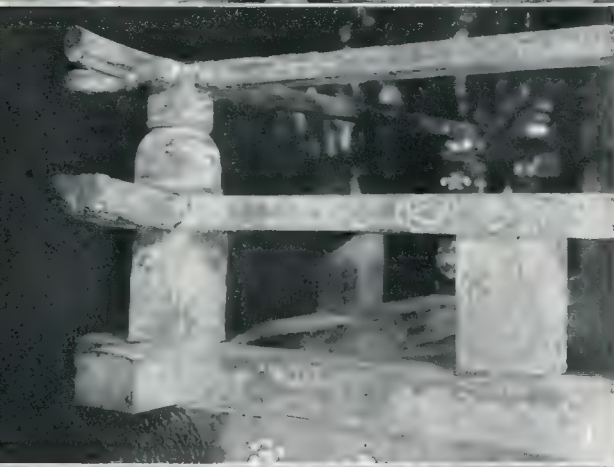
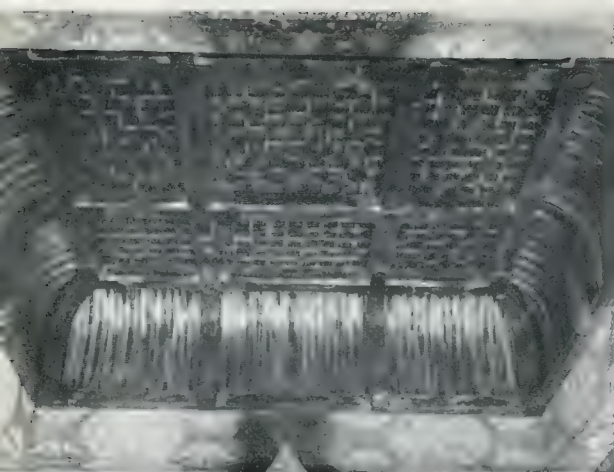
金色堂は方三間宝形造(ほうぎょうづくり)．屋根は木製瓦の本瓦葺でかつては宝珠を戴いていたものだろう．堂の屋根も軸部も，漆と金箔を置いて仕上げてあった．むろんすべて剝落している．柱や扉の寸法は甚だ大まかで，よく見るとそれと分るほどの歪みがあったりする．全体としては平安時代阿彌陀堂建築の好箇の遺例である．堂はほぼ東向きであり，西方淨土の阿彌陀如來がこちらを向き給うとする淨土教の思想をあらわすという．

①後よりみる北側面．②扉をあけた背面．③南角からみる前扉．④北側面．

軒下の棰は，繁棰で二重，下の地棰，上の飛檐棰ともに角材で軽快な反りをもつ．円柱，長押，三ッ枓組枓栱，單純質素な本蟇股，両開き板扉と出八双金具など，すべて和様である．⑤は屋根の木製瓦．数枚つづきの一木彫．⑥側面の扉をあけて内部を覗くと，薄暗い中に佛像の立ち並ぶ内陣が浮ぶ．⑦の金棺は先年まで清衡の遺骸を収めていたもの．

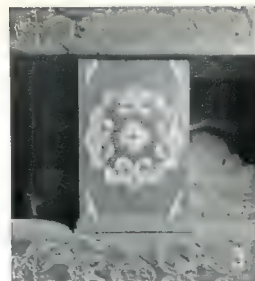
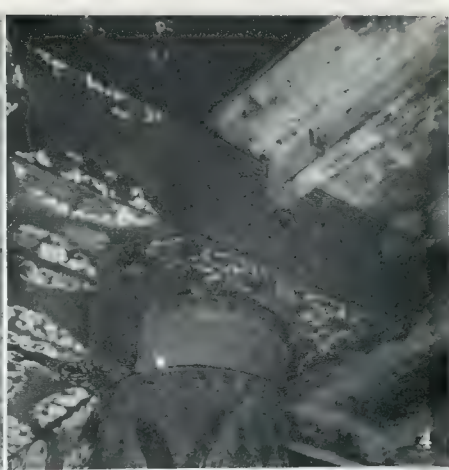
堂の内外，すべて粗布を張って厚く漆を置きその上に金箔をおしたのだが今は黒漆の傷んだ肌を露わしている．僅かな金箔がまだ残るが，黒ずんで眼につかず，たまたま剝落するものが光のかげんできらりと輝いたりする．

②は秀衡壇，③は基衡壇．中央須彌壇に比べると見劣りがする．左壇は様式から見て右壇より古く三代秀衡の壇と傳えるのはふしぎなので，実は左が基衡壇だが左右の呼称を誤ったものと解されている．

1

堂内には三つの須彌壇がある．内陣中央方一間が初代清衡の壇．向って右基衡壇と左秀衡壇とは二代三代の当主が各々造り加えたもの．各壇の下に棺が収めてある．壇上にはそれぞれ阿彌陀佛を中心に，脇侍，二天，それに六地蔵を配する．余す隈もない燦然たる荘厳の中に極楽浄土を表現したものであった．だが今は金箔も螺鈿もおおかたは落ち柱の蒔絵も褪せて，堂は黒と朽木色と淡赤色との沈んだ調和のうちに寂びた姿を見せる．

①内陣柱の部分．内陣柱は環帯で四区に区劃され漆地に蒔絵や螺鈿の象嵌で佛形や宝相華文様をあらわす．亀裂を防ぐため桶のように数枚の板を締めて中空に作られ，十幾層にも塗ってある．②のように破損している所ではその手法がよくわかる．

③中央内陣の天井は支輪で折り上げた小組格天井．金箔をおしてある．左右壇は板張りの天井で外陣は化粧屋根裏に繋虹梁．

④勾欄は紫檀の薄片でつつみ螺鈿を施したものだがほとんど剝落している．架木や平桁の形などはよくこの時代の様式を示す．

⑤須彌壇の格狭間は藤原盛期のものらしく美しい曲線をもつ．打出金具の孔雀と宝相華の意匠は格狭間ごとに変化をみせる．

①内陣柱の柱頭．三ツ枓組の形がよく分る．螺鈿で宝相華文様をあらわす．

②華鬘（けまん）．金銅製で宝相華の透彫地に迦陵頻伽（かりょうびんが）が浮彫になる．格狭間の曲線に通うふくらみのある形．

⑤⑧長押（なげし），無目（むめ），頭貫（かしらぬき）の宝相華文様．⑤は螺鈿を⑧は金具をもちいた部分．

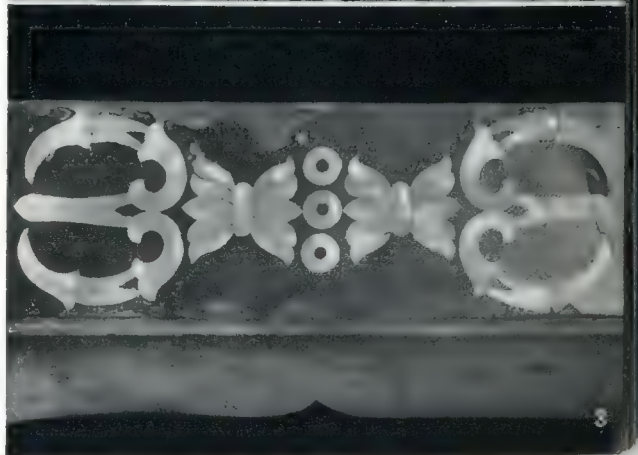
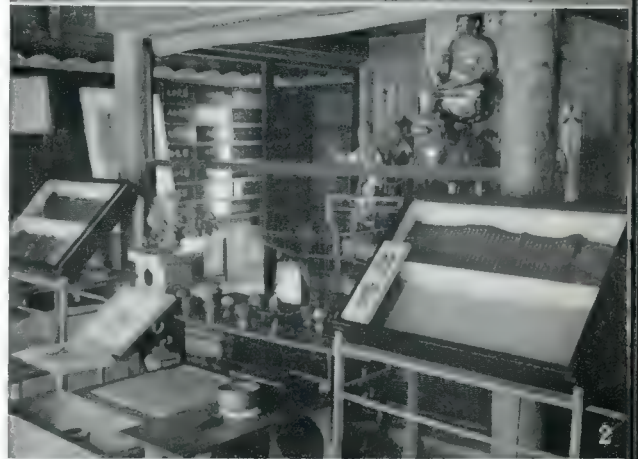
④右壇，⑦左壇の天井．⑦の方は中央壇の長押にもたせかけており，④のは中央壇長押を切り込んでいる．左壇，いわゆる秀衡壇の方が丁寧なのでこれが時代も古く実は基衡壇だとの解釈を強める．

⑥⑨勾欄の束．螺鈿の剝落したあとに技巧の時代差が窺える．⑥は細工を惜しまぬ中央壇．⑨は貝の隙を漆で埋めて仕上げた脇壇．③は復元した束．

経　　　蔵

①②経蔵は三代が奉納した一切経三部をおさめた堂．当初は二万巻もあったろうといわれるが，或は焼失，或は散逸して残るのは二千八百巻足らずである．経蔵の建物ももとは二階造だったが1337年の大火で上層が失われた．当時の用材が一部に残っているが，それから推して建物の装飾は極彩色だったことが分る．経は三方の棚に収めてある．

⑤本尊は文殊菩薩．それに優塡王，浄名居士，善哉童子，佛陀波利が従う．須彌壇は八角形．金色堂のそれとともに和様須彌壇の典型的な美しいもの．格狭間の浮彫は迦陵頻伽．

③④須彌壇の細部．螺鈿で③は三鈷杵．④は三鈷鈴をそれぞれ文様化する．

佛　像，その他

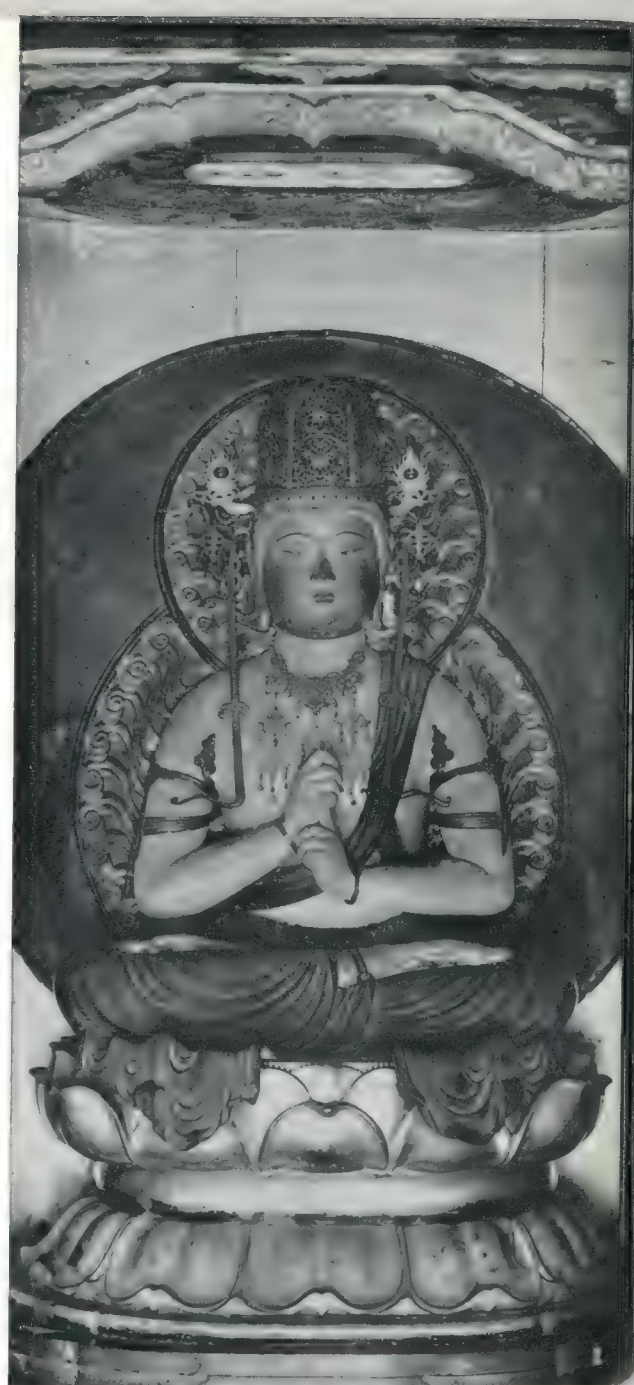
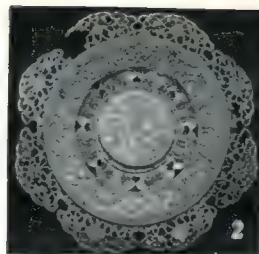
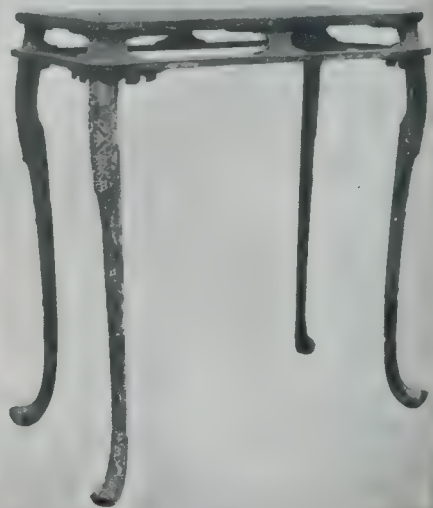
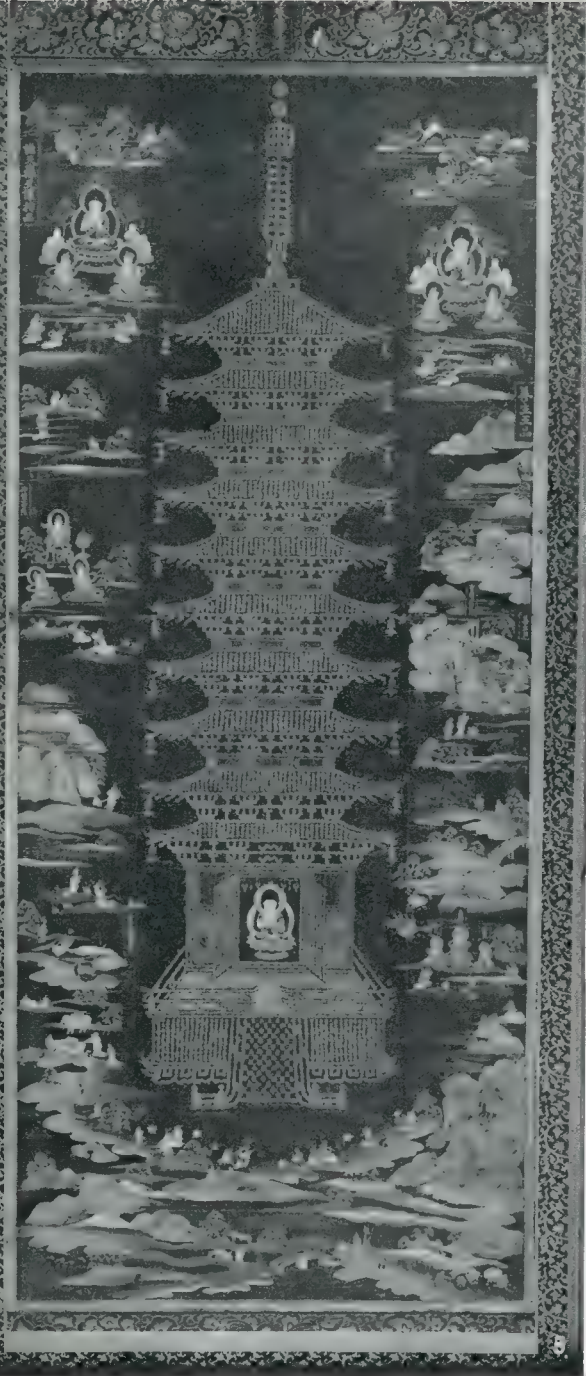
金色堂の佛像は，中央壇のものが最も優れておりふくよかでおちついた感じを持っている．時代の違いとでもいうものか左右壇にはこの感じが薄い．

③中央壇の本尊．上品上生の阿彌陀如來．光背は他の佛像のも同様だが後代の作．⑤同壇六地藏尊の一つ．後補の光背は取り去ってみた．④同壇多聞天．⑥右に対應する持國天．一說にはこの二像を持國および增長とする

①同壇の脇侍の一つ，大勢至菩薩．後補の宝冠や光背をはずした姿である．

②は本坊の本尊阿彌陀如來．鎌倉初期の作と推定されるもので，高さ九尺三寸，寄木造漆箔．両肩両膝は取外しできる．閼伽堂の藥師もおなじ手法．

①一字金輪大日如來．俗に人肌大日と呼ぶ．藤原期の作で，秀衡念持佛と傳える中尊寺の祕佛．木彫で高さ二尺五寸．②からも分るように，像は背面を欠き，体內は空洞である．佛身は肉色，眼には玉眼を入れ，唇と頰は紅い．女体を思わせるその柔らかな質感のためによく知られた佛像である．

③千手堂安置の千手観音．藤原期の作．一山の立像中最も大きく高さ六尺余．⑤瑠璃光院所管の金剛界大日如來．中尊寺諸佛像の中で最も古く藤原初期と思われる落着いた感じの秀作．一木彫一尺九寸．④閼伽堂釈迦如來．本坊の阿彌陀と同じ時代．寄木造漆塗．高さ九尺三寸．⑥峯藥師堂藥師如來．素朴で前者より古い．寄木造漆箔．高さ八尺九寸余．

金色堂の荘厳具，その他佛具の若干はいま宝庫にある．①は宝庫に残された五種の木彫光背の一つ，六地蔵のものといわれる．現在の金色堂佛像光背は伊達家が作ったもので様式も手法も本体とは異る．②透彫八稜天蓋．木製で径二尺七寸余．これも美しい宝相華を彫る．概して，金色堂の螺鈿，金具，木彫等に見られる宝相華文様は藤原盛期の様式をよく代表するものである．③金色堂にもちいた磬．建立当初の作とみられる．④金銅柄香炉．破損が少いので，藤原期柄香炉のめずらしい遺品だという．⑤経蔵の螺鈿卓．螺鈿は今一脚にのみ残る．やはり創建当時の作であろう．⑥金銅透彫の幡頭．宝相華の地に天人をあらわす．

①②③三代はそれぞれ一切経一部を中尊寺に奉納した．清衡のは金字と銀字を一行交りにした紺紙金銀泥一切経，基衡のは金字のみのもの．秀衡のは宋版の黄紙一切経であった．金銀泥一切経の写経は千人の僧をもって，八年を費したという．これは基衡の金泥一切経で，一巻ごとに見返絵の意匠を変えている．紺紙とは，藍で染めてすきあげた紙．

④⑤最勝王経十巻を十幀とし，各々紺紙に金泥で経の文字を宝塔形に書きあげたもので，金光明最勝王経十界宝塔曼荼羅と呼ぶ．秀衡の奉納と傳えまた彼の自筆とさえいう．一切経も曼荼羅（まんだら）も，紺紙の藍色に金銀泥の文字がいまも鮮かに冴えている．

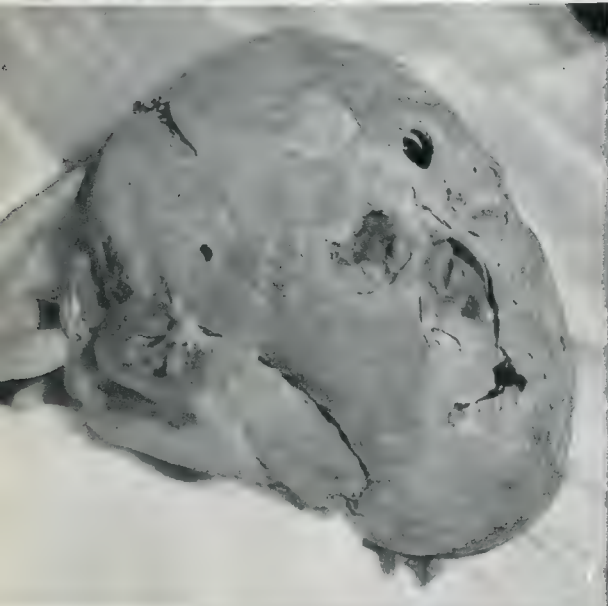
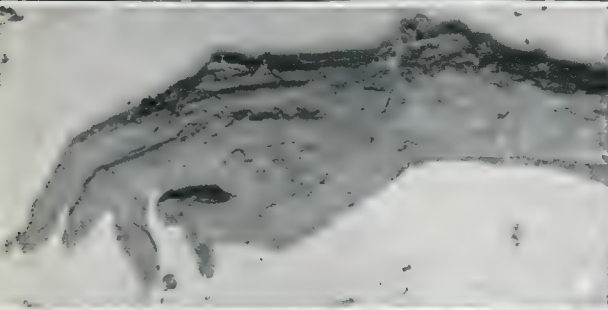
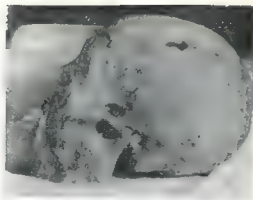
遺体の調査

金色堂のように、遺骸をそのまま堂内に葬むるといった例は薄葬を習わしとした当時の京都にはなかった。それに四代の遺骸が腐敗せずミイラ化して遺ったことが自然の結果とは考えにくいので、そこから奥州藤原氏が彼らの血に根ざす特殊な思想なり習俗なりを持っていたのではないかという疑問が起るのである。蝦夷即アイヌとするかなり一般化した学説の存在が、この疑問に形を与えた。だから昭和二十五年、中尊寺の希望によって朝日新聞文化事業團が各方面の専門家を集め、藤原氏遺体学術調査團を組織したときも、興味の一部は藤原四代の身体にアイヌらしい特徴があるかどうかという処にあった。だが骨格の計測や指紋の研究は、藤原氏の容貌も体軀も現アイヌには似ておらず現日本人に近いことを示した。また遺体のミイラ化が人為的処置が施されたためか否かについては、これを決定する根拠が不十分だったが、それは鼠や虫が既にかなり遺骸を損壊してしまっていたせいでもある。完全な技術は用いていないが、一應遺骸を腐敗させまいという意図はあったとみて妥当ではあるまいか。なお四代の遺体とは、清衡・基衡・秀衡の全身ミイラに通称忠衡の首級——実は泰衡らしい——を加えていうのである。

遺体の調査

調査が行われたのは三月末のこと．まず棺を金色堂から本坊へとはこぶ②．三代の棺はどれも内外に金箔をおした寢棺で，明治時代に作りかえた秀衡棺のほかは，遺体の胸又は腹の下にあたる棺底に一，二個の小さい穴を開けてあった．④は清衡棺．

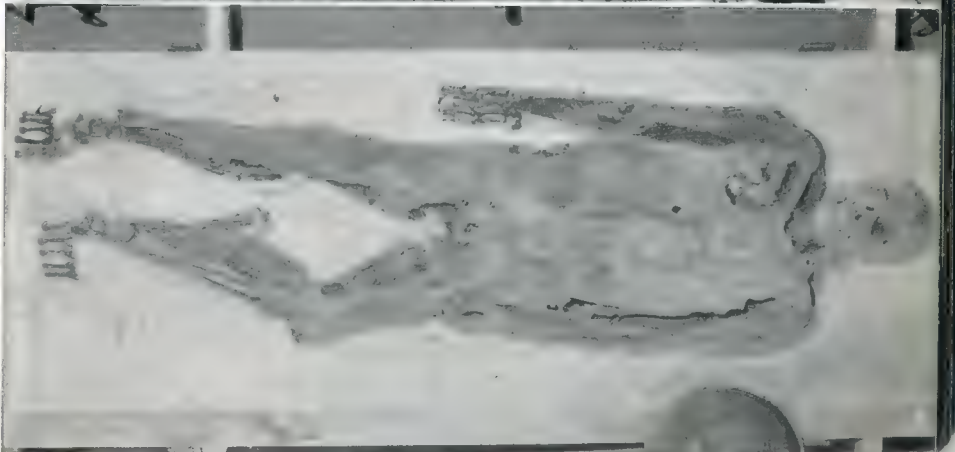
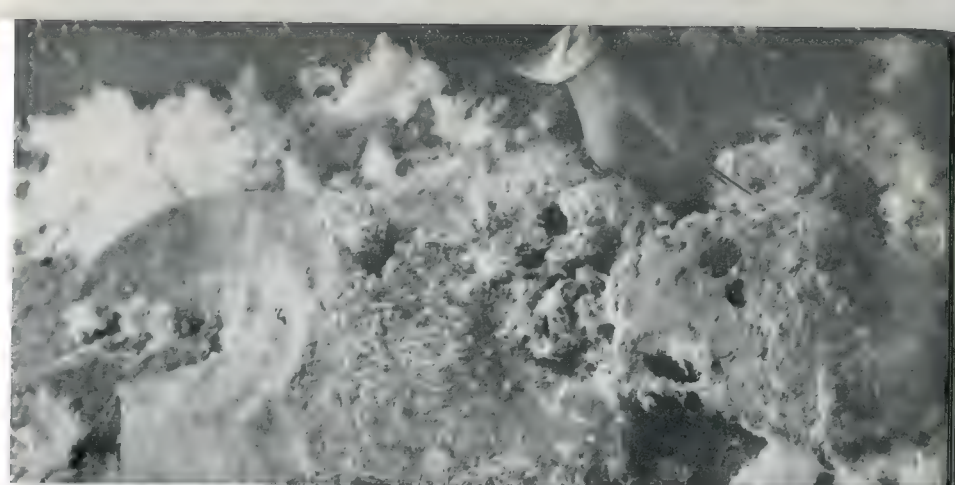
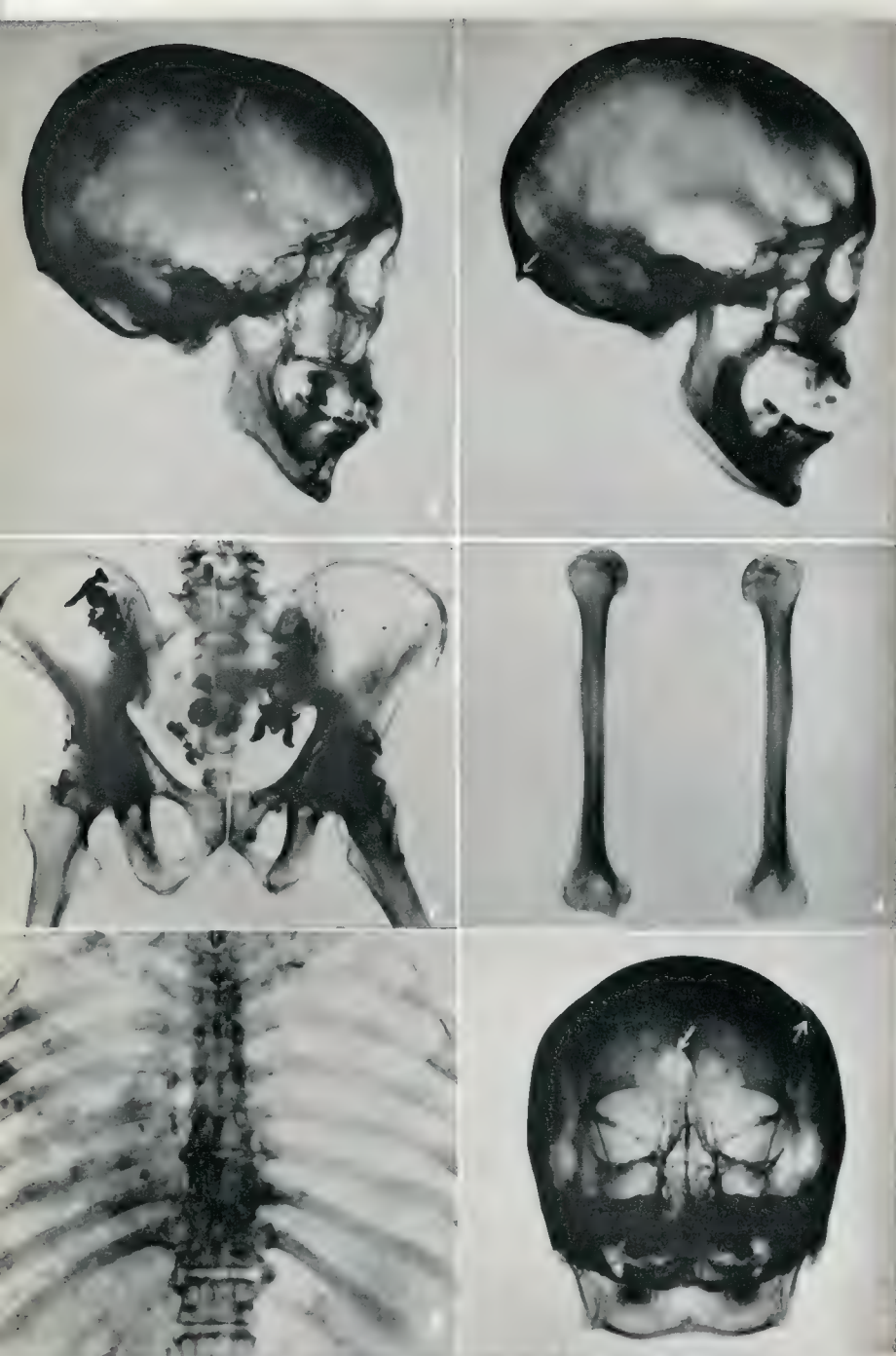
昭和六年に寺僧が開棺したとき，アリゾナ石綿を棺に詰めておいた．これは遺体の損傷を防いだが同時に濕氣の害をも與えたようだ①③⑤．濕度調査や黴生物採集をやりながらたんねんに石綿を取り除かなくてはならない．

⑥清衡棺の內部．清衡の遺体はいちばん保存狀態が惡くて大部分が白骨となり，その間に念珠や薄と蜂を螺鈿で表わした赤木の柄の刀などがあった．

①石綿を剝がしてゆくと次第に遺体があらわれる.
②皮膚の表面を筆で擦って微生物の採集を試みる.
③石綿を除きおわった遺骸. かるく膝を曲げた安らかな姿勢. 以上は基衡.

④清衡の頭部. 他の部分に比べ, 保存状態がよい.

⑤左から基衡, 忠衡の首級, 秀衡の順. どの遺体も内臓を欠くが, 人為的に摘出したものか否かは不明. それは鼠や虫による損傷がひどくて, 内臓の欠如はかれらの仕業だとも思われるためである.

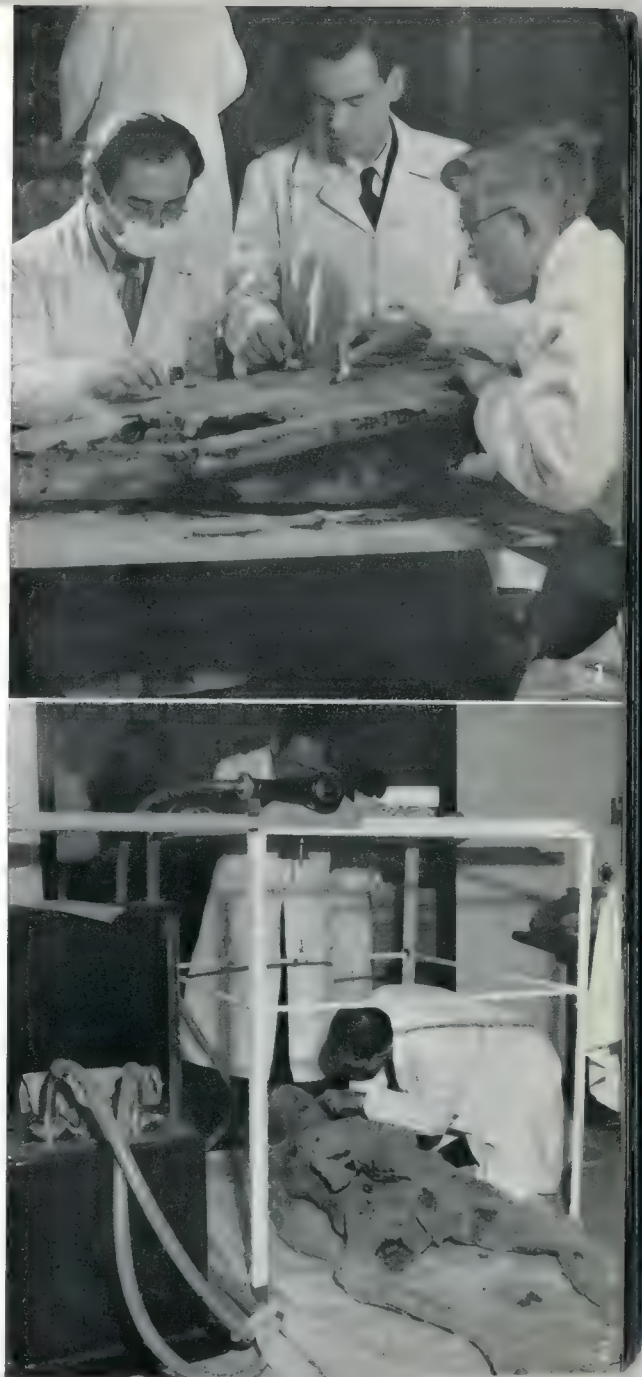
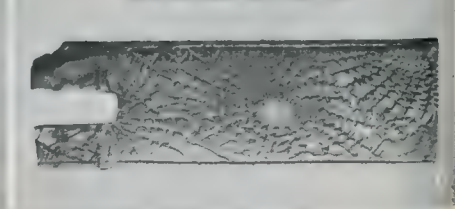
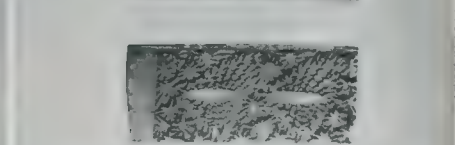
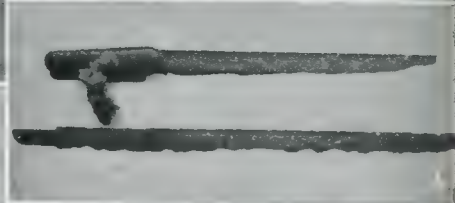
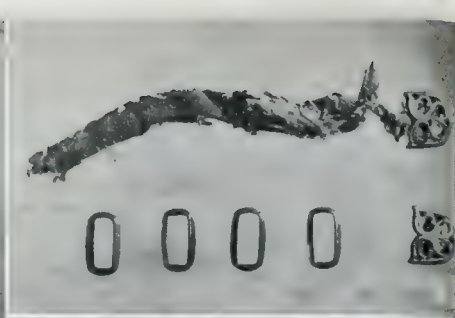
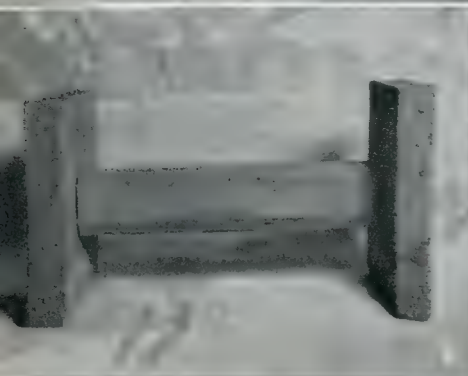
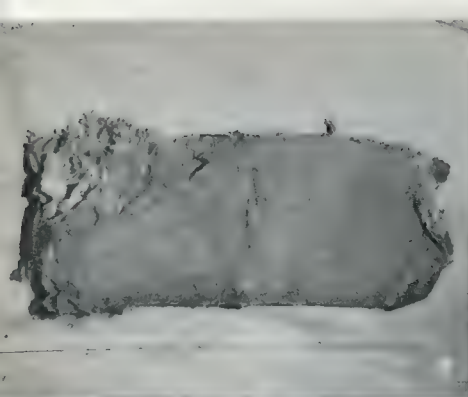
⑥秀衡の形の整った手.

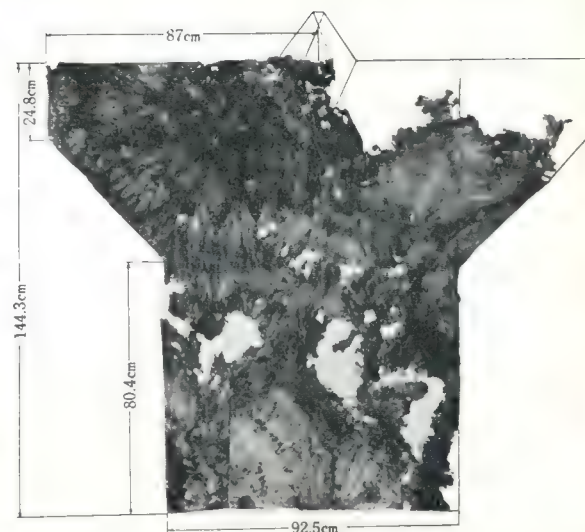
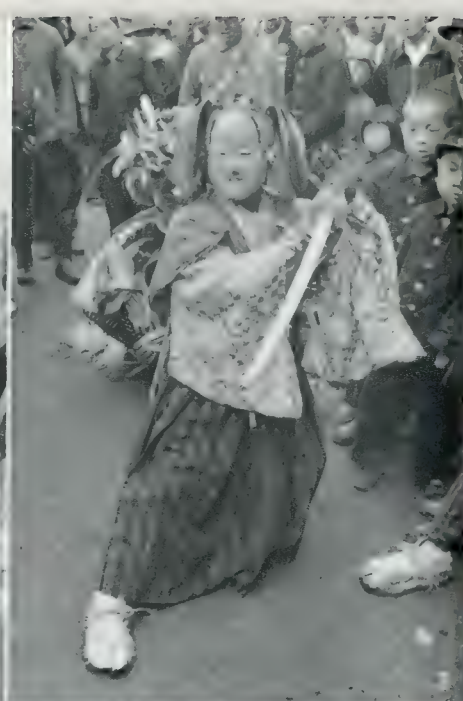
⑦忠衡首級. これが実は兄泰衡だとする主な理由は, 額から頭蓋を貫く孔があって, 泰衡の首が釘で打たれて曝されたという史実に合うことである.

①遺体の表面をさまざまの薬品で拭き，抽出し得たものを調べる．なお遺体には，朱や漆を用いて保存をはかった痕跡は全くなかった．これは基衡．

②秀衡の遺体のレントゲン撮影．歯の状態からも年齢や人種的特徴を見分けられる．清衡，秀衡の場合は一部であるが指紋をとることにも成功した．

各遺体のレントゲン写眞．
③清衡の頭部．矢印の後頭骨隆起は，武藝作法や具足の着用が原因であろう．⑥の基衡頭部も同様．
⑥基衡の頭部．板障靜脈管(矢印)がはっきり見えるのは脳圧の上昇を示す．

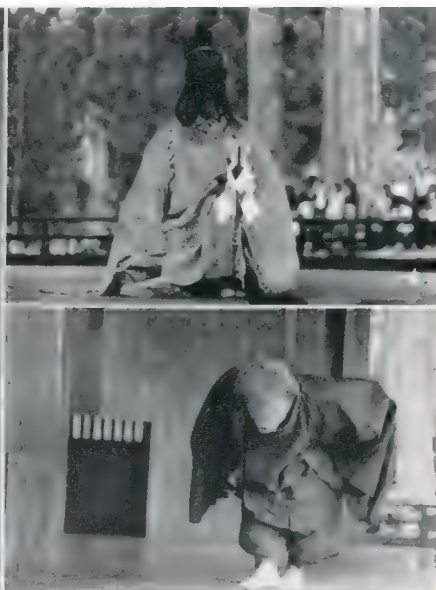
④は清衡の上膊骨．左腕(むかって右)には骨の破壊が見られ，これは半身不随の状態を推察させる．
⑦基衡の腰部．骨盤内に瓔珞や装飾品が写っている．挿入したものか鼠の運んだものかわからない．

⑤忠衡の首級．実線矢印は釘を打たれたための前頭骨の孔．点線矢印は生前うけた傷と推定される．
⑧秀衡の胸椎．中央に見える暗い部分は，骨髄炎性脊椎炎の症状を呈する．

①基衡の遺骸を包んでいた小袖の残欠を整理して原形に近づけたもの．白平絹の袷仕立て，袖はいわゆる‘もじり袖’である．②基衡棺の底に敷かれた錦の断片．地色は金茶色に残り，文様は藍，薄縹，薄緑，白の四色で織り出してある．地色ははじめ紅色だったかもしれない．文様から受ける感じは藤原時代の織物よりもむしろ奈良時代のそれに近い．

③清衡の棺から発見された革先金と七ッ金．金と銀をもちいた精巧な細工．④添樋のある直刀．一口は刀身のみ．いずれも清衡棺から出たが鞘はない．⑤上の大刀の柄．赤木に薄と蜂とを描く螺鈿文の優雅さに，目貫(めぬき)の紅染組紐はふさわしくなく太い．⑥刀装具．上は藤原趣味の蜂の螺鈿文を施した柄で，清衡棺よりでたもの．他は鹿角に彫刻したもので基衡棺からでた．これらは明らかに蝦夷文様である．⑦清衡の枕．絹綿を芯にし，平絹で三重にくるむ．⑧秀衡の枕．詰物や表の布は失われて芯木のみ残る．⑨念珠(ねんじゅ)．一連のものと琥珀は清衡棺．他は基衡棺から出た，技巧をこらしたものである．

祭り

春になると，平泉では春の祭りが賑やかに行われる．①剣舞(けんばい)はこの時の行事の一つで若者が集り，大道で踊る．衣川村に残された風習で由來ははっきり分らないが，お釈迦様⑤が現われて，世にはびこる惡魔ども③④⑥を降伏させるという踊である．②弁慶力餅も祭の催物．餅を結びつけた約四十貫の箱を腹にのせ，何米歩けるかをきそう．

今日の平泉

史蹟と國宝美術品がないとしたら平泉はただの貧しい農村である。わずかな宿屋と土産物店の並ぶ駅前通りの裏にはもう田圃が廣がる。それも毎年北上川の氾濫に脅かされる田地で、現に昭和二十三、四年と続いた台風の打撃からほとんどの農家が五、六年先までの借財を負っているという。寺の方はというと、終戦後はかなり窮した中尊寺も、参詣人が増え寺領も返還されてやや立ち直ったようだ。こうした変化は中尊寺だけのことではなく、ここ数年來の社会の動きを語るともいえよう。平泉という土地は京都などと違って昔の文化の水脈がとうに断たれている。ただ若干の美術品のほかには、毛越寺などに残る慣習があるのみである。往時の繁栄ということがうりものにはされるが、藤原三代が遺したものはもはやそれに調和する環境を持たない。そこで今は全く平凡な人々の生活と豊かでない土地とから、かえって或る古さが滲み出てくる。もの靜かな川の眺めなどが、ふと回想を呼び醒すのである。

能　　　　　　　　　楽

中尊寺能楽というのは寺内白山社に奉納する御神事能である．喜多流に属し各僧坊は持ち役を世襲している．先代には衰えたが，いまの住職たちはまた能を盛んにしようとしている．もともと壇家の少い中尊寺にとっては（村民の七割までは昔から龍玉寺という眞言宗の寺の壇家である）こういう生きた催し物で地方民の関心を繋ぎとめておくことが必要である．

①春の祭に能楽を奉納する．この時の主な催物は 新 作 能「秀衡」．②③いつもは靜かな山もさすがに賑う．

能番組のはじめにある古実式三番．⑥開口，④祝詞，⑤老女，の各場面．

3

①②あちこちにみられる農家風景．壁に寄せかけた白い束は皮をむいた大麻．この辺りは麻作りを副業とする家が多いのである．

③櫻並木の美しい旧國道．北上の氾濫に損われることが度重なって，ついに見棄てられた道．やがては崩れてしまうことだろう．

④⑤藤原三代が平泉に移植した京都風の地名の多くは消滅してしまったが，まだ生き残っているものもある．これはその一例だ．

1

2

4

5

6

農　家　風　景

①麻は冬の間に乾燥させて，春になると田圃や池の水に三，四日漬けておく．これは長者ヵ原にて．

ふやけた頃を見計って皮を剝ぎ②，この皮をまた二日ほど水に浸す．それをしごくと③，眞白な繊維が輝き出る．しごいた滓もよく晒して打つと重いが蒲團綿の代りになる．

④たいていの農家では冬の間，軒に味噌玉を吊す．豆を煮て潰しこうしておくと味噌の色が濃くなる．

⑤子供たちは壁に寄せかけた麻のかげで遊ぶ．これはもう皮を剝いだ麻で束の上に滓が乾してある．

⑥関山の下の廣い道を面白い馬車の一行がやって來る．花婿と花嫁を前に坐らせ，うしろにはま新しい簞笥や盥や俎を積み，のんびりした唄声で新婚を披露している．花婿をはじめとし，したたかに酔った一行は，やがて物見高い子供の群を従えて街道の夕闇に消えてゆく．

1

3

2

岩波写真文庫目録

1* 木綿
2 昆虫
3* 南氷洋の捕鯨
4* 魚の市場
5 アメリカ人
6 アメリカ
7 雪の結晶
8 写真
9 レンズ
10* 紙
11 蝶の一生
12 鎌倉
13 心と顔
14 動物園のけもの
15 富士山
16 積雪
17 いかるがの里
18 鉄
19* 川 —隅田川—
20 雲
21 汽車
22* 動物園の鳥
23 様式の歴史
24 鉱山
25 スイス
26 スキー
27 京都—歴史的にみた—
28 力と運動
29 アメリカの農業
30 アルプス
31 山の鳥
32 奈良の大仏
33 尾瀬
34 電話
35 野球の科学
36 星と宇宙
37 蚊の観察
38 長崎
39 高野山
40 正倉院(一)
41 彫刻
42 仏像
43* 化学繊維
44 蛔虫
45 野の花—春—
46 金印の出た土地
47* 東京—大都会の顔—
48* 馬
49 石炭
50 桂離宮と修学院
51 日光
52 醤油
53 文楽
54* 水辺の鳥
55 米
56 正倉院(二)
57* 石油
58 千代田城
59 歌舞伎
60 高山の花
61* 波
62 京都御所と二条城
63 赤ちゃん
64 オーストラリア
65* ソヴェト連邦
66 能
67* 造船
68 東京案内
69 平泉
70 手術
71 宮島
72 広島
73 佐渡
74 比叡山
75 阿蘇
76 信貴山縁起絵巻
77 針葉樹
78 近代芸術
79 日本の民家
80 季節の魚
81 シャボテン
82 新劇
83 郵便切手
84 かいこの村
85 伊豆の漁村
86 奈良—東部—
87 奈良—西部—
88 ヒマラヤ
89 上高地
90* 電力
91 松江
92 動物の表情
93 金沢
94* 自動車の話
95 薬師寺・唐招提寺
96 日本の人形
97* システィナ礼拝堂
98 美人画
99 日本の貝殻
100 本の話
101 戦争と日本人
102 佐世保
103 ミケランジェロ
104 空からみた大阪
105* 宗達
106 飛驒・高山
107 ゴッホ
108 京都案内—洛中—
109 京都案内—洛外—
110 写楽
111 熊
112* 東京湾
113 汽車の窓から—東海道—
114 地図の知識
115 姫路
116 硫黄の話
117 伊勢
118 はきもの
119 隠岐
120 源氏物語絵巻
121 農村の婦人
122 出雲
123 アルミニウム
124 水害と日本人
125 日本のやきもの
126* 貝の生態
127 イスラエル
128 伴大納言絵詞
129 瀬戸内海
130 飛鳥
131 聖母マリア
132* 日本の映画
133 能登
134 山形県
135 福沢諭吉
136* 利根川
137 鹿児島県
138 伊豆半島
139 日本の森林
140 高知県
141 チェーホフ
142 仏教美術
143 一年生
144 長野県
145 塩原
146 日本の庭園
147 木曽
148 忘れられた島
149 近東の旅
150 和歌山県
151 函館
152 豆
153 大分県
154 死都ポンペイ
155 富士をめぐる—空から—
156 神奈川県
157 柔道
158 戦争と平和
159 ソ連・中国の旅—桑原武夫—
160 伊豆の大島
161 ジョットー
162 熊野路
163 鳥獣戯画
164 愛媛県
165 やきものの町
166 冬の登山
167 埼玉県
168 男鹿半島
169 フランス古寺巡礼
170 滋賀県
171 白浜
172 東京国立博物館
173 千葉県
174 箱根
175 細胞の知識
176 四国遍路
177 村の一年—秋田—
178 セザンヌ
179 石川県
180 琵琶湖
181 仏陀の生涯
182 香川県
183 日本 -1955年10月8日-
184 練習船日本丸
185 悲惨な歴史—ドイツ—
186 ボッティチェリ
187 東海道五十三次
188 離された園
189 松島
190 家庭の電気
191 アメリカの地方都市
192 五島列島
193 塩の話
194 パリの素顔
195 横浜
196 日系アメリカ人
197 インカ
198 奈良をめぐる—空から—
199 子供は見る
200 雪舟
201 東京都
202 アフガニスタンの旅
203 渡り鳥
204 群馬県
205 ブラジル
206 ルーヴル美術館
207 北海道(南部)
208 小豆島
209 日本 -1956年8月15日-
210 富山県
211 毛織物の話
212 北海道(東・北部)
213 自然と心
214 空からみた京都
215 世界の人形
216 愛知県
217 諏訪湖
218 鉄と生活
219 山口県
220 麦積山
221 北京
222 江南
223 四川
224 広州—大同
225 室蘭
226 山水画
227 三重県
228 白山
229 鵜飼の話
230 島根県
231 小さい新聞社
232 北海道(中央部)
233 近代建築
234 岡山県
235 ねずみの生活
236 札幌
237 日本 -1957年4月7日-
238 広島県
239 北陸路
240 倉敷
241 ギリシアの神々
242 長崎県
243 水郷—潮来—
244 福井県
245 秋吉台
246 子供の絵
247 徳島県
248 十勝平野
249 岐阜県
250 青森県
251 中国の彫刻
252 熊本県
253 秋田県
254 苫小牧
255 山梨県
256 新潟県
257 村と森林
258 茨城県
259 福島県
260 旭川・大雪山
261 大阪府
262 奈良県
263 北アルプスの山々
264 地形の話
265 静岡県
266 軽井沢
267 佐賀県
268 日本の社寺建築
269 宮崎県
270 十和田湖

新刊

271

272

273

*印は品切でございます

低い楊の茫々と生い茂る北上の岸辺